



沖縄キリスト教平和研究所

ニューズレター 第2号 2012年1月

平和研究所の一年

所長 大城 実

2011年は穏便に幕が明けたと思ったら、とんでもない年になってしまった。3.11 東日本大震災は未曾有とも想定外とも言われる壊滅的な災害をもたらした。多くのいのちが奪われ、残された者も心身ともに傷を負った。職場が破壊され、職を失い路頭に迷う人たち、漏れ続ける放射線の恐怖に怯え、我が家に帰れない人たち、目を覆いたくなる瓦礫の山；最近の地震考古学の研究によると未曾有でも想定外でもなかった。むしろ人災ではなかったかと思う。本学からも何組かの学生がボランティアに参加した。敬意を表したい。

教会の戦後史をテーマにした連続講座の第一ラウンドは4月に終了した。現在その講演録を出版すべく作業を重ねている。近いうちにお目かけられると思う。第二ラウンドも計画中である。

研究所の働きとしては、10月初旬の「9条アジア宗教者平和会議」が筆頭に挙げられるだろう。私たちの発案ではなかったがアジアの宗教者がこの沖縄に集まり、日本国憲法9条の意義を語り確認し、宗教と国境を越えて護る決意をした事は意義があった。特筆したいのは、自衛隊に取られていた土地を取り戻し独自の活動をしている沖縄の固有宗教の一つ「神人」が参加したことである。今回は東京、韓国での開催に続く第三回であったが、既に次の開催地としてフィリピンが名乗り出ており、準備が進められている。開催地実行委員会の事務局を勤めた研究所員の働きを多としたい。又労を惜しまず開催に協力して下さった本学の教職員の皆さんには紙面では礼を失するとは思いますが心から感謝申し上げたい。

10月には加藤哲平氏に古代の聖書翻訳の「誤訳」を例に挙げて最近の聖書学の動きについて3回に亘り講演をしていただいた。

12月12日にはジャーナリストの重信メイさんに「中東問題とソーシャルメディア」と題して最近の中東問題のルーツとメディア論についてお話しいただいた。複雑な中東問題を解りやすく話されると共に「ソーシャルメディア」の功罪に触れての言及には興味をそそられた。

今一つ、仲里朝章文書の整理を急いでいる。建学の精神理解に重要な文書なので皆さんと共有できる状態にしたい。本学図書館との共同作業である。乞うご期待！

(目次)

巻頭言

人は皆自分の中に

歴史を読む

韓国の民衆神学

これまでの活動

9条アジア宗教者会議

慈しみとまことは出会い

正義と平和は口づなし

まことは地から萌えいで

正義は天から注がれます。

(詩編 85:11-12)

研究所

〒903-0207

沖縄県中頭郡西原町字

翁長 777 番地

TEL.098-946-1279

FAX.098-946-1312

<http://www.ocjc.ac.jp>

E-mail:ocpi@ocjc.ac.jp

「人は皆自分の中に歴史を読む」

名護 良健

(研究員、沖縄バプテスト連盟中城城東教会牧師)

私は 1956 年の琉球大学入学、一植民地大学と揶揄された時代—1960 年に献身、神学校入学、60 年安保闘争、1979 年宣教師解任事件遭遇、こう挙げれば個人的体験ではある。しかし、歴史は個人的体験を超えてその中に時代の歴史を読むことでもある。つまり戦後の沖縄の歴史、国の歩みとかを読むこともできるからである。第二次流大事件があり、当時、「植民地大学」とか「8 ミリ大学」とか揶揄された時代である。入学の年に「学生の処分」があった。当時、琉大に顧問団として大学運営に関与していた「ミシガン・ミッション」によるものである。事の起こりは、「琉大文学」の反米的な記事にある。アメリカ民政府が圧力をかけたもの。結局は 7 名の学生が退学処分などをうけたもの。そういう時代であった。

学内を闊歩する顧問団のアメリカ人教授らに誰もが違和感をもっていたのではないか。私は教員を目指したが牧師の勧めで神学校進学することになり、たまたまあの「60 年安保闘争」に遭遇する。もちろんノンポリ学生としてである。全学連の活動家がたまたまクラスにいた。彼は全学連委員長でもあった。あれから 51 年、「沖縄を返せ」「安保廃棄」とシュプレヒコールをあげたが、沖縄返還は実現したがわたしにとってはあの安保闘争はまだケリがついていない。なぜなら沖縄の全国一の基地負担は変わらないし、米軍からみの事件事故は多いからである。30 年も普天間基地近くで仕事をして、今その地を離れてみて改めて基地問題の重さを確認しているこのころである。沖縄の歴史の現実に浸るのである。この島の歴史の重荷はいつおろすのかと思うこと切である。

またあの安保闘争とはなんだったのか？何が問われたのか？ 安保闘争世代のセンチメンタリ

ズムとか、未だ総括されず、とか色々と言われるが、一体、あれは何だったのか？ この国のあり方が問われ、この島の未来が問われたのではないかと思う。

沖縄の未来についてはいろんな議論がある。居酒屋独立論から世界共和制、真近の県民大会のチラシに「琉球臨時政府樹立、国連総会で承認」というものもあった。われわれ県民一人ひとりが真剣に考え、行動することが大事であろう。国のありかたが問われることは、天皇制が問われることであり、靖国問題が問われることでもある。私の叔父も靖国に合祀されているが、まだ健在の叔父は合祀を是としているが、甥の私は納得していない。死者儀礼は本来遺家族のものであり、赤の他人が関与すべきではない。「お国のため」というのも詭弁である。

今ひとつ、わが牧師人生のエポックとして「宣教師解任事件」がある。わが教派の一宣教師が反戦思想などを理由にアメリカのボードから解任された事件であるが、当時、わが教会で共に働く協力宣教師であった。1979 年のこと。そもそもわが教派は組織の中に軍人を主体とする英語教会をいくつか抱えていることも関係がある。当初はその英語教会の献金がわが組織の年間予算の 8、9 割を占めていたこともある。植民地教会と言われたこともある。教会では一部信徒が離脱したり、組織からの除名騒動までであった。私は同士と共に同宣教師支援に乗り出した。この戦いはなかなか大変なことではあった。なにしろ歴史始まって以来の宣教地の教会の反乱？であったわけで、全国的な支援のお陰で難局を乗り越えたものである。この戦いを通して学んだことは「教会は歴史を担えたか」ということであつたように思う。結論としては、残念ながら否！である。こうしてみると「自分の中に歴史を読む」というのが分かる。

女性の視点で語る韓国の教会(1)

「韓国の民衆神学とは？」

～その歴史と展開

イム・ボラ

韓国キリスト教長老会 ヒャンリン教会 副牧師
2010年当研究所特別研究員

[はじめに]

わたくしは、1993年から伝道師として牧会をはじめ、今年で17年目になるので、まだ自分のことを子どもだと思えます。そして、民衆神学を語ると言っても神学者というよりは、民衆神学を基礎として牧会をしている者なので、学問的というよりは、キリスト者として生きていながら、また牧会をしながらずっと思っていた韓国教会、歴史、社会の中心として語りたと思います。

まず、このタイトルから始めたいと思います。‘女性の視点’というのは、ただ、わたくしが性別的に女性なのでつけたわけではありません。時代が変わって女性は弱いものでもないし、差別も無い時代ではないですか、と言う方もいると思いますが、‘女性’という言葉は、いまだに差別されており、いまだに苦痛を受けている女性を含め、さまざまな形で‘叫び声’(出エジプト記2:23)をあげている、神から命をもらったすべてのものを表す言葉です。言い換えると、権力を全然持っていない人たちの視点で語るということです。

二番目に、‘韓国・ナンカン(南韓)の教会’という言葉ですが、皆様にとって韓国の教会といえ、次の二つの点で知られていると思います。

その一つは全国民の18%ぐらいがキリスト者であり、世界の中で一番大きい教会だと知られている‘ヨウイド純福音教会’をはじめ、メソヂスト教会、長老会教会など大きさで言うと世界最大トップ10に入る教会がずいぶんあるということです。純福音教会は登録している信徒の数が75万人ぐらいと言われているので、現在、沖縄の人口138万人の内、半分ぐらいの人数が一つの教会

の信徒の数と言え、わかりやすいでしょうか。キリストの体としての教会はなんだろうかを考えてみれば、これは教会というよりは、韓国的な近代化の流れの中で適応の戦略をした結果ではないかと思えます。

もう一つ、韓国の教会と言え、韓国の社会での民主化、人権、民族統一に取り組んできた歴史を持っているということです。この民主化の流れの中では韓国の教会だけではなくて、ドイツや日本、カナダなどいろんな国のキリスト者からもたくさんの応援や、直接的な援助を受けました。このような韓国教会の取り組みは韓国的な近代化の中で適応してきた韓国の教会とは違う、近代化の中で対決してきた韓国教会を代表すると言えます。簡単にいえば、政治的に独裁政権と新軍部の政権に協力をしたか、それとも対決し抵抗してきたかによって韓国の教会は分けられると思います。

この二つの流れは、ただその時代だけではなく、今もずっと続いている韓国教会の主な流れだと言えます。このように、韓国教会を分けて見る視点は政治的、社会的、経済的な分析によってもっと詳しく比較をしながら話しすることもできますが、もう一歩進めて、歴史的な視点をどのように持つかが非常に重要な課題になるので、それをまず語りたと思います。歴史的なイエスや聖書の歴史をどのように理解するかによって聖書の解釈もまったく違うからです。

たとえば、最近、第2期韓日歴史共同研究委員会の最終の報告書が出ました。結果的にいうと古代の歴史については、なんとか一致が可能に見えますが、韓日の歴史で一番敏感な部分になる強制併合や植民地としての朝鮮の近代化の過程、慰安婦や強制労働を強要された朝鮮人、歴史教科書など、新しい政権に変わった日本政府に対してちょっとした希望をもっていた韓国人はこの結果を見ながら絶望をしました。

‘過去の歴史を直視する’という民主党の話とはまったく違う結果が出てきたからです。このような歴史的な視点の差は被害者の立場と加害者の立場が違うからです。この点は、民衆神学でも主

な視点になるので、どのような視点から見て理解をしているかについて注目してください。

[韓国の社会と教会の歴史]

1. 映画で見る韓国の現代史

- 1) 1950年代の韓国戦争：
トンマッコルへようこそ(原名: 웰컴투 동막골)
パク・クァンヒョン監督、2005年
- 2) 1960年代の4・19革命 50周年：
<http://www.youtube.com/watch?v=g-5dn8e13Gs>
- 3) 1970年代の『民衆神学の形成に影響を受けた事件』：
美しい青年 ジョン・テイル
(原名: 아름다운 청년, 전태일),
パク・クァンス監督、1995年
- 4) 1980年代の5・18クァンジュ(光州)闘争
クァンジュ 5.18(原名: 화려한 휴가),
キム・ジフン監督、2007年
- 5) 1980年代の6・10抗争：
<http://www.youtube.com/watch?v=6UisrlQwu0&feature=related>
- 6) 2000年代のロウソク集会：
<http://www.youtube.com/watch?v=FpwSZgoV7r4&feature=related>

2. 韓国キリスト教の歴史

- 1) 現在を理解するための歴史的な時期区分-
特に、社会参与を中心として(ソ・ジョンミン教授、ヨンセイ大 神学部の区分により)
 - ①イデオロギー的なキリスト教の時代、受容期から大復興運動(1880年代-1907年)
 - ②大復興運動以後の福音主義、あるいは根本主義キリスト教時代(1907年-1930年代)
 - ③日帝末期の殉教、受難、受容、積極的変質の韓国キリスト教時代(1930年代後半-1945年)
 - ④分断と戦争、そして5.16軍事クーデターまで、政治的社会的既得権としての南韓キリスト教時代(1945年-1961年)
 - ⑤少数の進歩的「民衆神学」派の政治的抵抗と、多数の保守的「福音派」の政教癒着密着、経

教癒着のキリスト教時代(1961年-1990年代)

- ⑥進歩的クリスチャングループの政治への第一線参与と部分的失敗、進歩・保守間の激しいイデオロギー対立のキリスト教時代(1990年代後半-2007年)
- ⑦多数保守「福音派」の政治的影響力拡大形成のキリスト教時代(2007年-現在) イ・ミョンバク政権

[民衆神学とは?]

神学の形成は、その時代の文化との関係から始まります。聖書というテキストと人間の生の場という相関関係の中から発生するからです。韓国の民衆神学は、1970年代という韓国の社会的な状況から発生しました。民衆神学は南米の解放神学の流れと似ているといわれています。解放神学が南米の社会的構造の矛盾を解決する為に生まれたように、民衆神学も韓国の社会的な構造の矛盾に対し、問題を解決する為に発生したからです。

1. 民衆神学の思想的背景

民衆神学の思想的な背景には、1960年代の世界的神学の特徴として、その神学の関心が個人から人間と歴史的共同体へと変化した影響があります。キリスト教の宣教も単純に「神のみ言葉」を伝える「福音化」ではなく、「人間化」という人間の解放のための行動的な参与へ移り、政治、経済、文化などまで拡大され、このような現代神学の影響を受けたのです。

1) 世俗化の神学

この世俗化の神学の根元はボン・ヘッファーにあります。ボン・ヘッファーは、キリストが教会にどのように関係を持っているかよりは、キリストはどのようにこの世に関係を持っているかに関心を持つ、現代の政治的現実に関する神学の道を開きました。彼はキリストを他者のために生きた愛の実践者として、キリストの救いを隣人に対する愛と理解し、神が人間になったインカネイション事件を通じてキリスト教の世俗性を強調しまし

た。彼はキリストを非宗教的に解析し、世を肯定し、他人の為の苦難の信仰を強調しました。このようなボン・ヘッファーの思想は民衆神学者の関心をこの世に向かわせるようにしました。

民衆神学者 ソ・ナムドンは“福音の伝達とその世俗的な解析”〔キリスト教思想〕、『기독교사상』1965 2 月)で、ボン・ヘッファーを韓国に紹介しました。彼は、ボン・ヘッファーを高く評価し、キリスト教の信仰というのは、隣人に対する奉仕、または活動と主張します。このようにボン・ヘッファーの神学が、1965 年以来、韓国のキリスト者に影響を持つようになったのは、信仰とは他人のために生きたイエスの存在に参与するということと共に、ボン・ヘッファー自身が独裁に反対する取り組みに献身したからです。

彼を通じて、民衆解放というモデルと事例をみたのです。ボン・ヘッファーなどの世俗の神学により、神学の関心は教会の中から教会の外に移ることが出来、その影響で民衆神学者は韓国の社会で疎外されていた労働者や貧民の問題へ目を向けるようになりました。

2) 希望の神学

ソ・ナムドンは、ゴガルテン (Friesrich Gogarten)、モルトマン (Jurgen Moltman)、パンネンバーク (Wolfhart Pannenberg) などの歴史神学者から韓国の民衆神学者が影響を受けたと説明をします。その中でも決定的な神学者はモルトマンだったといえます。韓国に招待されての講演会でモルトマンは、民衆を‘オクロス’と定義します。ここで民衆という意味は、支配者に対立する用語として使われているのです。民衆は貧しい人たちが学んだことも無い、イエスは民衆の一人として、自身を彼らと同一視したという内容でした。そして、モルトマンは、教会の使命は個人を回心させるよりは、社会的・構造的な矛盾を改革することと説明します。そして、神学の課題もこの社会で人間が人間らしく生きることが出来る、神が思うような世界を作っていくことだと言いま

す。このようにモルトマンは民衆神学たちに政府に反して民衆のために闘争をする神学的な根拠を提供しました。

3) 解放神学

民衆神学と解放神学には、はじめに語ったように神学が発生した環境と状況の共通点があります。解放神学は、経済的な従属と社会的な不義の状況から出発するからです。解放神学の関心は南米のこのような不義によって抑圧されている人を解放する闘争にありました。それは教会が第3世界の貧しい人たちの為、社会的な責任を取りながら革命の過程、階級闘争に取り組みをしていくことです。

解放神学は、神学的な方法論の面からも民衆神学へ影響を及ぼしますが、これは状況の神学で、実践する神学であるからです。ソ・ナムドンは彼の神学の方法論を紹介しながら、1970 年代から、解放神学に関心を持つようになったといえます。

4) 神の宣教 (Missio Dei)

現代神学への影響と共に実践的な問題に取り組むように神学的な影響を及ぼした神学は、神の宣教 (Missio Dei) だと言えます。1961 年インドのニューデリーで開催された世界教会協議会 (WCC) の第3 回総会での主題は“世の光、イエス・キリスト”で、キリスト教の社会参与でした。そして、1973 年タイのバンコクで神の宣教の意味が定義されます。伝統的な宣教と違う点は、キリスト者の信仰は個人的な救いだけではなく、救いは全社会的、政治的な正義として現れる。したがって、経済的な正義、政治的な正義、自由と文化的な更新の為の闘争だと、世界を全体的に解放したことだと思います。この神の宣教は韓国キリスト教長老会に属する神学者によって韓国に紹介され、歴史的に参与する神学、行動の神学の基礎を提供し、人権運動、政治参与、社会への参与という形で現れ、このような動きが民衆神学につながりました。

[民衆神学を語る]

1. 民衆神学と聖書

民衆神学では、聖書の研究のため、歴史批評、様式批評、編集史批評などの解析方法論を受容し、それに加えて、社会学的聖書解析方法論も積極的に受容します。社会学的聖書解析論というと、聖書が書かれたその時代の文化、社会、歴史などの相互関係を理解するための概念とモデルを探すことだと言えます。

アン・ビョンムは、マルコの福音書の立場は、ローマ帝国に国を奪われ自分の故郷から離され、異邦の地を徘徊する現場と見ました。それで、彼はガリラヤを強調し、‘ガリラヤはイエスの状況で、同時に民衆の状況なので、政治、経済、文化、社会的に理解しなければならない’と説明します。そして、聖書の文字一つ一つが神からの靈感によって書かれているから間違いが無いという逐語靈感説を批判し、聖書の本質は民衆の解放への歴史なので、民衆神学の視点で聖書を読むことは民衆の立場から民衆の目で読むことだ、そしてその民衆の目は民衆が生きている具体的な歴史の現場で読むことだと言います。

2. 民衆神学とイエス・キリスト

アン・ビョンムの視点では、ギリシャとローマの文化での宣教の目的は、イエスを神として宗教的な英雄を作ることだったので、神と人間両方-神人両性論など、このような西欧のキリスト論の流れの中で、イエスの生は抜けていると批判します。民衆は歴史の中で贖罪の供え物で、イエスの苦難は個人的なものではなく、民衆と共に贖罪の供え物としての苦難だったと言います。イエスの事件(出来事)は今でも起こっていると強調します。

キリストと民衆が同じなら、民衆は誰が救うのか?というモルトマンの批判に対し、“民衆は、民衆の事件の中で民衆自身が救う”と言いながら、民衆たちが苦難を連带的に認識しながら、解放運動へ取り組みをすることに救いがある。支配者の救いは、この民衆の闘争で可能になると言います。

3. 民衆神学と神

神は民衆の神で、聖書の神は出来事を起す力だ。ユダヤ人がハピルという、どこにも属することなく徘徊をしていた時の神が民衆の神だと言います。この神がダビデ王朝により王権を守る神になり、聖典の捕虜になり、またイエスを通じて貧しい人、周辺に追い出された人たちの神になるということです。イエスの出来事は神を経験する事件で、民衆により出来事が起こるその場で神を経験することが出来るという、社会的、歴史的な意味を強調します。

4. 民衆神学と聖霊

アン・ビョンムは、聖霊はひとつの出来事で、人間を解放する力だと言います。ペンテコステでの聖霊降臨の出来事は民衆による革命で、自己を超越し、自己利益を超えて解放の状態になり、今までの自己を葛藤の歴史の中に身を投げながら歴史を変革することを可能にする力と言います。

5. 民衆神学と神の国

イエスの最初のメッセージは、‘神の国が来た’ということでした。西欧の神学では、神の国をこれから来る国として強調するが、民衆神学ではこれらの点を批判し、民衆の苦難があるところに神の国がある、だから、神の国への信仰は民衆解放運動へ取り込むことだと宣言します

[民衆神学の流れ]

1) 第1世代 (～1960, 70年代)

ジョン・テイル事件 / ヨーロッパやアメリカの神学の影響への反省、批判、反神学、脱神学 / 社会的に離農現状による都会の労働者/階級の一番下のグループが民衆

2) 第2世代 (1980年代)

クアンジュ(光州)事件、反資本主義、アメリカへの新しい認識、学生運動、労働者運動、マルクス主義(マルキシズム)、民衆運動との連帯 / 帝国主義、資本に抵抗

3) 第3世代 (1990年代～)

社会主義の没落、グローバル時代、これまでの政治的、経済的認識から文化的にも広がる、権力の解体に集中、帝国主義に対する国家主義、階級闘争以外、複雑な状況を反映

4) 多様な民衆神学(現在～)

民衆についての多様な意味を探しながら、模索をしている。民衆女性神学、民衆宗教神学、ディアスポラ神学、クィア神学など

[民衆神学、新しい時代的な課題]

民主神学の特徴はなにかを一言で言うのは難しいが、それは民衆神学者はそれなりのいろんな思想的なカラーや、方法論を通じてその時代が持っている問題に神学的な答えを出す為にキリスト教の伝統を改めて再解析してきたからだといえます。

民衆神学の多様性の要因の中で、まず‘民衆’への解析について語りたと思います。カン・マンギルという韓国の学者によると、文書として‘民衆’という言葉が初めて使われるのは、1923年、シン・チェホの“朝鮮革命宣言”だといえます。これは‘植民地での被圧迫な民族’という意味でした。

第一世代民衆神学者、ソ・ナムドンは、“庶民大衆”という言葉を使いますが、‘社会学的’、言い換えれば、経済的に貧しい、政治的には圧迫され、社会的には搾取されても文化的、歴史的には強い命を持っている集団と、初期の民衆神学は理解しました。でも、1990年代からは歴史的な変化による神学的な反省を始め、民衆は社会の特定な集団というよりは、その集団が持っている‘存在論的’な性格を象徴するようになりました。民衆は社会的に単純なカテゴリで語る事が難しいが、‘歴史の命’‘創造をリードする存在’と言えるでしょう。特にアン・ビョンムは、民衆の存在論的な特性に関心を持っていたので、民衆を‘命’‘命の根源’と表現しました。

このような変化は、歴史的な状況に対しての敏感な反応で、これからの民衆神学が社会的に特定な集団に献身するだけではなく、聖書のキーワードといえる‘解放と救いを実現’するための歴史的、神学的な本性を維持することだと思います。

結論的に言うと、主な民衆神学者とよばれる、ソ・ナムドン、アン・ビョンム、二人を含め、現

在の流れまで、民衆神学の中心的な思想といえば、‘民衆中心的な観点’を持ちながら、キリスト教の伝統を主体的に再解析するという事だと言えます。それで、民衆神学は韓国(朝鮮)の歴史や伝統を神学の中心の主題として、伝統的なキリスト教神学を再構成し、土着化してきました。これは、西欧の神学とは違う、学問性を前に出すよりは民衆の解放、救いという実践的な課題に集中してきました。

このような実践を指向する神学は、関心を韓国(朝鮮)という状況に土着化しながら、民衆の苦難と希望に応答し参加してきました。1970-80年代は特にこのような実践でキリスト教の内だけではなく、社会的にも影響力を持つ事ができました。でも、民衆神学はもう終わったという人もあり、民衆神学は古い信条だ、などの批判もありますが、民衆神学の多様性やアイデンティティーを混同してはいけないと思います。

それは、これまでの神学も歴史の中で土着化した表現の結果だし、民衆神学は土着化の過程の中で、抑圧を受けてきた者の視点で解析し、抑圧されたものの希望を代弁し、聖書での解放の神、弱い者の苦しみの中でインカネーションするキリスト、脅かしから救い命の道に導いてくださる聖霊という、信仰のキーワードを民衆神学は持っているからです。

神学といっても、歴史性を失った神学は今の状態の中での神学の使命を全うすることが出来ない観念的な神学になる危険があります。また、抑圧を受けたものの視点ではなく、抑圧者の立場に立つ神学はイデオロギーになり、宗教的な真実を歪曲し、今までの帝国主義に助力する神学に違いないと思います。

民衆神学の未来は、いままで繰り返したように、‘再解析’‘再構成’の過程の中で模索することによると思います。

(2011年4月6日、日本キリスト教団沖縄教区との共催講演会より)

【これまでの活動】

○ 主催行事

特別研究員・加藤哲平氏による講演会

第1回 10月28日(16時30分)

テーマ:「誤訳」に学ぶ——古代の聖書翻訳から

第2回 10月28日(19時)

テーマ:新約聖書における旧約引用の問題

——ヒエロニムス『最善の翻訳法』を中心に

第3回 10月29日

テーマ:カウンター・ヒストリーとしての教父研究

——ヒエロニムスと19世紀のユダヤ教科学

学生活動 (TEAM 琉球)

学生と共に沖縄の歴史、沖縄戦、米軍基地の現状などを学び、学生が主体となって様々な発信をしていく。

4月25日 学内発表

6月23日 国際沖縄反戦集会において活動報告

8月14日～20日

日本キリスト教団東北教区・被災者支援センター「エマオ」を拠点に被災地ボランティア



(仙台でのボランティア)

12月14日 長野県明科高校修学旅行に

ついて南部戦跡ガイド。この準備のため学習会、現地研修を綿密に行う。

仲里朝章文庫

本学創立者である仲里朝章の手書きによる膨大な文章をPDF化して保存すると共に、研究者、学生が閲覧し、学ぶことができるようテキストデータにしていく作業を開始した。これは本学図書館との共同事業である。

第一回連続講座講演録

講演テープおこし、講師による訂正を経て現在編集作業中。講演内容は以下の通り。

「戦後の沖縄における教会の歩みと回顧

～苦難の中での平和の願い～

- ① 戦争責任告白はキリスト教会史の分水嶺
(平良 修)
- ② アジア・世界の破れ口に立って
～もはや「何事もなかったように」宣教することはできない～
(饒平名 長秀)
- ③ 私の歩んだ道～天皇教からキリスト教へ～
(仲村 實明)
- ④ 強制集団死から命の尊厳と真の平和を求めて
(金城 重明)
- ⑤ 教会はどこに立つのか
～基地の街の教会の歩みを通して～
(名嘉 隆一)
- ⑥ 植民地の住人として
(山里 勝一)
- ⑦ 平和の実現をめざしてハンスト・佐藤総理の訪米反対
(仲尾次 清彦)
- ⑧ 戦争と教会・戦後の宮古島伝道
(城間 祥介)
- ⑨ 教会は歴史を担えたか?
(名護 良健)
- ⑩ 70余年を生かされて・戦中戦後体験から拾う
(中原 俊明)
- ⑪ マボロシの『琉球教会』
～「原点」への回帰を求めて: 何が「原点」を見えなくしたか～
(大城 実)
- ⑫ 日本基督教団「沖縄教区」はどこからどこへ
(神山 繁實)

○ 共催行事

5月13日 パレスチナ問題講演

講師：原 隆氏

(日本・パレスチナ プロジェクトセンター運営委員)

講演：アラブ民衆革命とパレスチナ問題
《沖縄 YWCA と共催》

6月23日 慰霊の日特別講演会

講師：金城重明氏

(元沖縄キリスト教短期大学学長)

講演：慰霊の日を覚えて

《日本科学者会議沖縄支部と共催》

10月23日 パレスチナ人女性シェリン・アレジ
さん講演会

講演：アル・ワラジャ村で進行しているイスラエ
ルの暴虐

《沖縄 YWCA と共催》

12月12日 特別講演会

講師：重信メイ氏 (ジャーナリスト)

講演：中東革命とソーシャルメディア

《沖縄 YWCA と共催》

10月5日～7日

第3回 9条アジア宗教者会議

2010年10月からこの会議開催のための準備を始め、当研究所は開催地事務局として作業をおこなってきた。沖縄の諸宗教に呼びかけ開催地実行委員会を組織し、特に仏教者との協力関係を深めることができた。

また本会議の一環として10月4日～5日昼まで現地研修プログラムを企画、70名ほどの参加者が戦跡、米軍基地、自衛隊基地、新基地建設予定地などを訪れ、生きた学びをすることができた。

9条アジア宗教者会議の開催について

開催地実行委員会

委員長 大城実

「9条を沖縄で実現し、9条を各国に紹介し、9条を国連憲章に書き込むこと」、そして「9条をすべての人の心にきざむこと」、そのために全世界の宗教者たちが知恵をこらし、祈りを合わせ、行動を共にする会議となるように願って計画された会議です。

「憲法9条の許に帰る」ということが私たちウチナンチュの悲願でした。今でもそうです。日本国政府が9条を蔑ろにしてきたからです。そして「民主国」アメリカが日本政府の弱腰に悪乗りして「暴力による平和」を頑強に推し進めているからです。その陰で世界各地の人たちの命が奪われ、愛する者が奪われ、生活の基盤を失い、貴重な自然破壊が続いています。

そのような悲惨な状況は権力者のみの所為ではありません。私たち国民が、特に権力の暴走をチェックすべき宗教者がその務めを疎かにしてきたからに他ならないと反省しています。その反省を平和実現に活かそうというのが9条アジア宗教者会議です。

憲法9条を改悪し、軍隊（自衛隊）を海外に派遣できるようにしようとの声が平然と声高に主張されています。9条を蔑ろにし、なし崩しにしようとする政策・施策が推し進められています。仮想敵国をつくり出し、国民の不安を煽っています。宗派の如何を問わず、今の状況は宗教者にとって看過することのできないことであります。

私たち沖縄にある宗教者も2回にわたるアジア宗教者会議を遂行してこられた実行委員会の呼びかけに応じて、宗派を超えて開催地実行委員会を結成し、宗教者として今の状況をどう捉え、すべての人が安心して生きられる社会をつくり出すために何ができるかを共に考え、行動することにしました。それが今回の宗教者会議です。

アジアと銘打ちましたが、アフリカ、ヨーロッパ、北米からの参加者が多数あります。残念ながら神道関係者からは反応がありませんでしたが、ユニークな会議になると思います。

会場の関係で参加数を制限せざるを得ませんでしたが、関心をお寄せくださると幸いに思います。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

基調講演

「憲法 9 条と沖縄の現実」

高良鉄美(琉球大学法科大学院教授)

発題とストーリーシェアリング

「平和憲法の観点から見た米国の軍事戦略と
韓半島」

チョン・ウクシク

(Civil Network for a peaceful Korea)

「沖縄からの発題」

高里鈴代

(基地・軍隊を許さない行動する女たちの会)

「江汀(カンジョン)海軍基地の問題点と実際」

チョウ・ヨンベ(チェジュ大学教授)

「強制集団死から生かされて」

金城重明(日本キリスト教団牧師)

「滞在する訪問者・フィリピンの話」

レックス・RB・レイエス Jr.

(フィリピン教会協議会総幹事)

「アメリカ人はアジア太平洋地域における米軍基地をどう見ているか」

ニコラス・メーレ(パクス・クリスティ米国)

「1985 年より沖縄平和祈念行脚を歩いて」

武田隆雄(日本山妙法寺僧侶)

「信仰間の対話を正義と平和の宗教間の連帯に変える」～宗教間の連帯運動についての考察

ジュナイド・S・アフマド

(ラホール経営大学法律政策学部・パキスタン)

「アジアにおける平和運動と 9 条」

スラッセ・コソルナビン(タイ仏教者)



第3回「9 条アジア宗教者会議」声明

ソウルから沖縄へ

2011.10.7

沖縄キリスト教学院大学

1. 第3回 9 条アジア宗教者会議は 2011 年 10 月 5 日から 7 日まで、220 名が日本、沖縄、韓国、台湾、フィリピン、タイ、パキスタン、南アフリカ、スイス、イタリア、カナダ、米国から参集し、沖縄の人々の体験に耳を傾け、学ぶために沖縄キリスト教学院大学を会場として開催されました。また、このたびの東日本大震災と福島第一原子力発電所事故による被害者に思いをはせ祈りつつ、命の重さを再認識し、ここに以下のことを声明いたします。
2. 日本においては、ただの一度も九条は実現したことがありません。特に日本の領土 0.6% を占めながら在日米軍の専用施設の 74% と自衛隊の存在をおしつけられている沖縄は、憲法 9 条からもっとも遠い現実を抱え続けています。そればかりでなく、鳩山総理大臣の沖縄の軍事基地の県外あるいは国外移転という言明は否定されて、沖縄の軍事基地は持続し、また新たに県内に建設されようとしています。さらに韓国の、国家から「平和の島」に指定された済州(チェジュ)島では、政府と軍とによって新しく海軍基地が建設されつつあります。われわれ

9条アジア宗教者会議は、陸、空、海軍施設の無制限の使用を可能にする外国軍基地協定は、沖縄の基地、濟州島の海軍基地あるいは訪問米軍に関する米比協定など、すべてを断固として拒否するものであります。

3. 上記の理由に基づき、私たちは次のことを求めます。

○日米両国の政府に対し、日本国憲法9条遵守を要求し、日本政府がこれを改悪するいかなる試みも退けます。

○米国への「思いやり予算」を撤廃し、被災地救援に充てることを求めます。

○米国の信仰共同体に対し、沖縄占領について沈黙のうちに加担してきた事実を見直し、その責任を告白し、普天間基地と他の沖縄基地の撤去と辺野古の基地建設計画の破棄を主張するように呼びかけます。

○核兵器の完全廃絶を求め、核エネルギーのすべての利用の継続について問題提起します。

○米国による戦争と「帝国」の構築がもたらしている殺戮の事実を認め、信仰者はアジア、中東、そして世界の軍事化に抵抗して、グローバルな運動に参加するように働きかけます。

4. 私たちは、韓国のソウルで開かれた第二回9条アジア宗教者会議声明の中で、9条はこれまでにないほど、地域的または国際的に有意義なビジョンであることを確認しました。9条はアジア共同体の未来を志向する中心的価値であります。

5. 沖縄には元来「非武装」という思想の伝統がありました。武器を持たない国であった琉球（沖縄）は清国（中国）との関係では冊封ということですが、1609年日本の薩摩藩の侵攻によって実質的に薩摩の支配下に置かれました。今年はその時から数えて402年目にあたります。さらに琉球王国は明治政府によって1879年に侵略併合され強制的に日本国の一部とされま

した。これが「琉球処分」であり、今年はそのから132年目にあたります。沖縄は15年戦争の際には日本の国家体制護持のための捨て石とされました。沖縄の住民は、沖縄守備軍として配置された日本軍によって、軍との「強制共死」を強いられました。住民を巻き込んでの地上戦が行われた沖縄では、日本軍による住民の虐殺、避難壕からの追い出し、さらに軍の命令による「強制集団死」が各地で起こりました。文部科学省は日本の歴史教科書からそうした事実を薄めようとする傾向が強くなり、それが裁判にまで発展することになりました。しかし最高裁は2011年、座間味島、慶留間島、渡嘉敷島における「集団死」には軍の命令があったことを認めました。

6. 1952年に日本が独立を回復したにもかかわらず、なお20年間沖縄は米軍統治下に置かれ、そのために米軍基地が存置されることになりました。この間、沖縄では、戦争を放棄する憲法9条を持つ日本に復帰したいという願いが大きな運動に発展していきました。その願いがついに実現したのが1972年のいわゆる「本土復帰」でした。

しかし、このことにおいてすら沖縄の期待と願いは裏切られる結果となってしまいました。非核三原則を持つ日本に復帰したのですから、当然沖縄にもその原則は適用されるはずでしたが、日米両政府は密約を交わし、沖縄への核兵器持ち込みは米国の判断に委ねられることになりました。

沖縄が望んだのは軍事基地のない島、せめて「本土並み」の状態になってほしいということでした。しかし、復帰後も沖縄に米軍基地が置かれる状況は変わりませんでした。そのうえさらに「本土並み」ということで自衛隊基地まで置かれることになりました。近年ではそれが宮古・八重山地方まで拡充されようとしています。

7. 日米安全保障条約と日米地位協定とによって、軍隊は日常的に沖縄の人々を苦しめています。その米軍が沖縄から出撃して、朝鮮戦争、ベトナム戦争、アフガン戦争、イラク戦争に投入されたのです。そして湾岸戦争以来、日本の自衛隊も米軍と一体となって戦争行為というほかないような行動をしているのです。

8. それは、憲法 9 条違反の米軍基地と自衛隊の存在を戦後の日本政府が認めてきてしまったからです。「世界で最も危険な基地」(ラムズフェルド元米国防長官の言葉)と言われる普天間基地の撤去、返還はいまだに目途が立っていません。80%以上の沖縄県民が反対しているにもかかわらず、日本政府は普天間基地の代わりに県内に新たな基地を建設しようとしています。生物多様性の観点からみても日本本土の 50~60 倍の多様性に富んだ辺野古の海を破壊し、埋め立てて新基地を作ろうとし、高江の森を破壊してヘリパッドを建設しようとしています。

そしていまだ撤去されない普天間基地に、また北部に建設しようとしている各施設に、米軍は新型機オスプレイを配備しようとしています。日本政府は沖縄の基地負担軽減を口にしますが、実態はこのように世界的に貴重な沖縄の自然を破壊し、基地や軍備の機能はますます強化されようとしているのです。

9. 日米両政府は、沖縄の基地は「抑止力」だといいます。しかし逆にそれは近隣諸国への脅威となっています。私たちは先祖から譲り受けた大事な土地から発進した爆撃機や軍艦が、地球上のいかなる地域においてもその住民をおびやかす、破壊、殺戮するのを黙視することはできません。

10. 軍隊は平和をもたらしません。日米両政府の嘘とまやかしにもかかわらず、日本国憲法の前文に「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意し

た。とあるように、私たちはすべての国の人民に「真実の性(しょう)」が有ることを信ずる故に、軍事基地のない世界を求めます。

11.9 条アジア宗教者会議がこのように沖縄で開催されたことの意義は、宗教者がこの沖縄の現状に触れて真に 9 条の実現をそれぞれの場で追及し、その実現に向かって歩むことにあるのです。

私たちは米軍基地がアジア各地と全世界に展開されることを阻止し、すべての軍事基地撤廃のために行動することを誓います。このための道は宗教者がそれぞれの宗教の立場から平和の実現を祈り、非暴力によって平和を造りだすために行動することであると、私たちは信じています。9 条の精神を体現し、生かしていくところに暴力への応えがあるのです。

《第 3 回 9 条アジア宗教者会議参加者一同》

【前号の訂正】

○行事追加

2011 年 4 月 6 日

イム・ボラ氏講演会

「女性の視点で語る韓国の教会」

(日本キリスト教団沖縄教区と共催)

○名前訂正

6 ページ 土井敏那→土井敏邦

○3 ページ 鎌田 史

(沖縄キリスト教学院大学大学院研究生)

→(沖縄キリスト教学院大学大学院修了生・1 期生)